

<大川小 還らぬ人へ> 未来の道 広島に重ね

原爆投下から71年となる8月6日、石巻市大川小の卒業生2人が、歴史の証人としてヒロシマを見詰めてきた原爆ドームを訪れた。

◎津波訴訟10月26日判決(7)紫桃朋佳さん、佐藤そのみさん



寺前さん(左)の被爆体験を聞く朋佳さん(中央)とそのみさん=8月6日、広島市

<妹への思い募る>

2人は専門学校生紫桃(しとう)朋佳さん

(18)=石巻市=と大学2年佐藤そのみさん

(20)=埼玉県所沢市=。共に大川小に通っていた妹を東日本大震災の津波で亡くした。

「戦争であれ、震災であれ、大切な人と離れ離れになった悲しみは同じ。強く生きて」

平和記念式典後、被爆体験を聞かせてくれた寺前妙子さん(86)の言葉に2人は癒やされた。

71年前のあの日、寺前さんは爆心地から約550メートル地点で被爆した。顔に大けがを負いながらも一命を取り留めたが、妹の恵美子さんは全身を焼かれ、13歳で他界した。

5年7カ月前のあの日、朋佳さんは妹千聖(ちさと)さん=当時(11)=とけんかし、「行ってきます」のあいさつを交わさず家を出た。後悔の念と、もう一度会いたいとの思いが募る。

通訳を夢見ていた妹みずほさん=当時(12)=を亡くしたそのみさんはあの日の朝、なぜかいらいらしていた。妹の「おはよう」に返事をせず、優しくしておけば良かったと悔いてきた。

2人と同様、妹を亡くした寺前さんは、今も過酷な体験を語り続ける。

朋佳さんは「今の自分にはできない。心の傷が癒えたら、人前で話せる時が来るかもしれない」と言う。

<校舎保存を訴え>

戦争体験と震災体験。過酷な体験を語り続ける心理的な負担の大きさは共通している。それでも多くの人が、未来の命のために「あの日」を語る。

原爆ドーム周辺を案内してくれた地元のボランティアガイド村上正晃さん(23)は、知らない事、知ろうとしない事が時に罪であることを教えてくれた。

「原爆ドーム前でピースサインをする人、騒ぐ人がいるのはなぜか。それは、過去にここで何が起きたのかを知らないからだ」

被爆者に聞き取りを続ける村上さんは「二度と同じことが起こらないよう、若い自分なりに丁寧に語っていきたい」と話す。

被爆体験のない同年代が放ったメッセージを、2人は重く受け止めた。

大川小の「悲劇」を繰り返してはいけないと、朋佳さん、そのみさんら大川小卒業生6人が「チーム大川」を結成したのは2014年3月。「地震や津波の恐ろしさを後世に伝えるきっかけに」と被災した大川小校舎の保存を訴えてきた。

参考にしたのは「平和への誓い」を象徴する原爆ドームだ。「被爆体験を思い出させる」と解体論も根強かったドームを巡る議論に、2人は大川小の在り方を重ね合わせた。

「震災を経験した若い世代と連携し、大川小で起きたことをしっかり伝えていきたい」若い2人は10年先、20年先を見据える。